

〔「蘇州の見る夢—明・清時代の都市と絵画—」展によせて〕

## 清代後期の画家と蘇州文人画の伝統

## —翟大坤「虎邱三賢祠図巻」—

翟大坤(字子厚、子扈、号雲屏、無聞子、?~1769~1804)は、中国・清代後期の文人画家です。嘉興(浙江省)の人で、父を早くに亡くしたため、子供のころに蘇州に寄寓しました。現存作例には諸家に学んだ倣古山水が多く、書もよくしたといえます。その腕前は、明代蘇州を代表する画家である沈周や陳淳にも並ぶと賞賛されています。

本展には、翟大坤の作品が2点出陳されます。1点は「書画冊」(個人蔵、図1・2)で、水墨の梅・竹・靈芝・枯木、没骨淡彩の桂花・薔薇・椿・菊・百合・鳳仙花・芙蓉などを各頁に描く小品です。それぞれ

図1

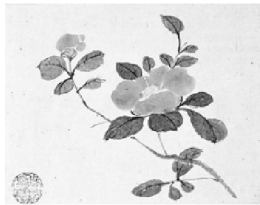


図2



れに対題があり、水墨による第1・5・10・12図の題では、翟大坤自身も流麗な書を披露しています。第3図の対題には、嘉慶2年(1797)の年紀があり、画冊の制作時期もこの頃と推定できます。

対角線上に折枝を置く構図は、奇をてらわないオーソドックスなものです。墨の輪郭線は軽やかで、没骨においても輪郭を明確に定めず、造形にゆるみを残しています。作り込みすぎない即興的な趣は、沈周・陳淳以来の吳派花卉図の伝統をふまえたものでしょう。ややむらのある色面で椿の花弁の厚みのある量感を伝え、墨に濁った青・青緑・赤茶など様々な色を重ねて菊の葉を表すなど、熟練した賦彩の技量も見所です。墨竹の枝幹の筆線は優美な弧を描き、葉の部分では濃淡の差をつけた湿筆と渴筆が使い分けられます。書家でもあった翟大坤の巧みな筆墨法がよく発揮された作品でもあります。

「虎邱三賢祠図巻」(京都国立博物館蔵、図3)の主題となった虎丘(邱)は、蘇州城から北西に四キロメートルほどの山塘に位置します。春秋時代に呉王夫差(?~前473)が父親の闔閭(?~前496)を葬った場所であり、その数日後に白虎が出現したため、虎丘と名付けられたという伝説が残っています。東晋の王珣・王珣が建てた別荘が虎丘山寺(雲岩寺)となり、唐宋代を通じて何度

図3



かの改名・改編・再建を経て、南宋時代には五山十刹の一つに挙げられる大寺院となりました。虎丘の景勝は、唐代に蘇州に赴任した白居易(772~846)や、宋代の蘇軾(1036~1101)など著名な文人に愛され、多くの詩が捧げられています。丘自体は高さ30メートルあまり、平坦な田畑中の小丘に過ぎませんが、数々の歴史や文学故事に彩られた、蘇州を代表する名勝の一つといえます。明代の蘇州では、地元顕彰意識の高まりから多くの名勝図が作られます。虎丘も格好の題材であり、特に沈周以来、多くの虎丘図が作られています。

翟大坤の「虎邱三賢祠図巻」には「嘉慶丁巳(1797)立秋後二日、写於帰硯草堂雲屏翟大坤」の款記があり、嘉慶2年(1797)12月の趙翼(1727~1814)、嘉慶10年(1805)の蔣業晋(1728~1805?)、嘉慶11年(1806)の王芑孫(1755~1817)の跋が合装されます。この内、蔣業晋と王芑孫は蘇州の人です。これらの跋文から、嘉慶2年、虎丘の東南にあった蔣重光(1708~1768)の大庭園・塔影園の地に三賢祠が建てられたことがわかります。三賢祠は、虎丘と縁の深い白居易と蘇軾、また、二人に先立って蘇州に遊び、「壯遊」を残した杜甫(712~770)を顕彰するための、思白堂・仰蘇樓・懷杜閣を指します。祠建設計画の中心となったのは趙翼と蔣業晋で、太守であった任兆炯らがこれに賛同し、ちよと売りに出されていた塔影園を1800金で購入しました。この志を記念するために蔣業晋が翟大坤に図を依頼し、さらに趙翼と

蔣業晋が白居易・蘇軾・杜甫の詩の韻を用いて作った三賢祠への題詩を巻の後に書いたのが本作品です。王芑孫は蔣業晋に頼まれて、題詩の後に経緯を記した図記を書いています。

画卷は虎丘に向かう山塘河に始まり、その先に小舟の多く停泊する塔影園の跡地が大きく姿を現します。背後に立ち込める霞の先には、雲岩寺塔や剣池など、有名な虎丘のランドマークが見えます。巻末では霞の割合が一層多くなり、けぼるような田畑と遠山がかすかに描かれています。山塘河を舟で北上して虎丘に近づいていくような画卷構成は、沈周款「呉中勝覧図巻」(ネルソン・アトキンス美術館)や謝時臣「虎丘図巻」(1536年、ボストン美術館)などと共通する伝統的なものですが、三賢祠に舟でたどりついたその先は、視点が急に高くなり、体が宙に浮いて虎丘まで一気に到達できるような、浮遊感のある空間構成がとられています。渴筆で直線的に引かれた虎丘の建物の輪郭や樹木の形には、「虎丘十二景図冊」(クリーヴランド美術館、図4)のような沈周画への思慕が感じられます。山塊に刷かれた淡い代赭と青緑の重なりや、樹叢の緑の階調などが、繊細で夢幻的な雰囲気醸し出しています。明代蘇州の文人文化へのオマージュに満ちた、美しい過去にタイムスリップするような感覚の味わえる、翟大坤の秀作です。(植松瑞希)

※図4はEight Dynasties of Chinese Painting (Cleveland: The Cleveland Museum of Art, 1980)から複写しました。

図4



季刊 美のたより No.192

平成27年 10月 10日

発行 大和文華館